

SSS013-P04

会場:コンベンションホール

時間: 5月25日17:15-18:45

過去（1965年～1997年9月）の気象庁震源の再計算

Relocation of JMA hypocenter catalog (1965-1997.9)

上野 寛^{1*}, 武田 清史¹, 足達 晋平¹, 岡本 國徳¹, 吉川 一光¹

Hiroshi UENO^{1*}, Kiyoshi TAKEDA¹, Shimpei ADACHI¹, Kuninori OKAMOTO¹,
Kazumitsu YOSHIKAWA¹

¹気象庁地震火山部

¹Japan Meteorological Agency

現在の気象庁震源カタログの震源データは、震源計算に用いる走時表、距離ウェイトなどの計算手法が時代によって異なっている。1965年～1982年までの震源データは市川(1971)の走時表を用いて計算されており、その震源の水平位置は1分毎、深さは10km刻みになっている。また、1983年～1994年までの震源データは、浜田(1983)の走時表を用いて計算されており、その震源の水平位置は0.1分毎となっている。1995年以降は一元化震源と同じ0.01分毎の水平位置となっているが、1997年9月までのデータは距離ウェイトが不連続に変化する関数を用いて計算されている。これらの震源計算手法の違いは、過去に遡った地震活動の評価を行う際に不都合を生じる。

今回、1997年10月以降（一元化以降）と同じ走時表、距離ウェイトを用いて1965年から1997年9月までの地震について、震源再計算を行った。その結果を報告する。

伊豆東部の過去の地震活動図を見てみると、再計算後の震源分布の方がよりまとまった分布となっている。しかし、最近の伊豆東部の地震活動は北西-南東方向に並んだ震源分布となっているが、1983年以前の再計算後の震源分布は再計算前と同じ北東-南西方向に分布している。これは計算に用いた観測点が疎であることが原因だと思われ、気象庁観測点だけの再計算震源では地震活動の詳細を捉えることは難しいと考えられる。

1978年に発生した宮城県沖の余震域周辺において、二重深発地震面が見えるようになるなど、一定の効果が得られるが、観測網が疎である時代では改善されない地域も多数見られる。

キーワード:震源再計算,気象庁震源カタログ,伊豆東部

Keywords: hypocenter relocation, JMA hypocenter catalog, East off IZU